

水辺の生きものたち ～昔と今～

玉井済夫 (和歌山県自然環境研究会)

The records of the Amphibious and reptiles in Kii Peninsula, Wakayama prefecture

By Sumio TAMAI

淡水の水域（河川・水田・池など）に住む主な動物たちを紹介し、その生息環境を考えたい。フィールドは主として和歌山県の南部である。

河川は周囲が広く森林（自然林）で覆われていることが大切であり、これによって河川の流量が安定し、豊かな生物相となる。源流域の魚類が生息しない場所では、紀伊半島の固有種であるオオダイガハラサンショウウオが産卵し、その幼生が生息する。幼生は1年以上もの間、この源流域で過ごすため、周囲の森林が豊かな自然林でないと、水が涸れて生息できなくなる。

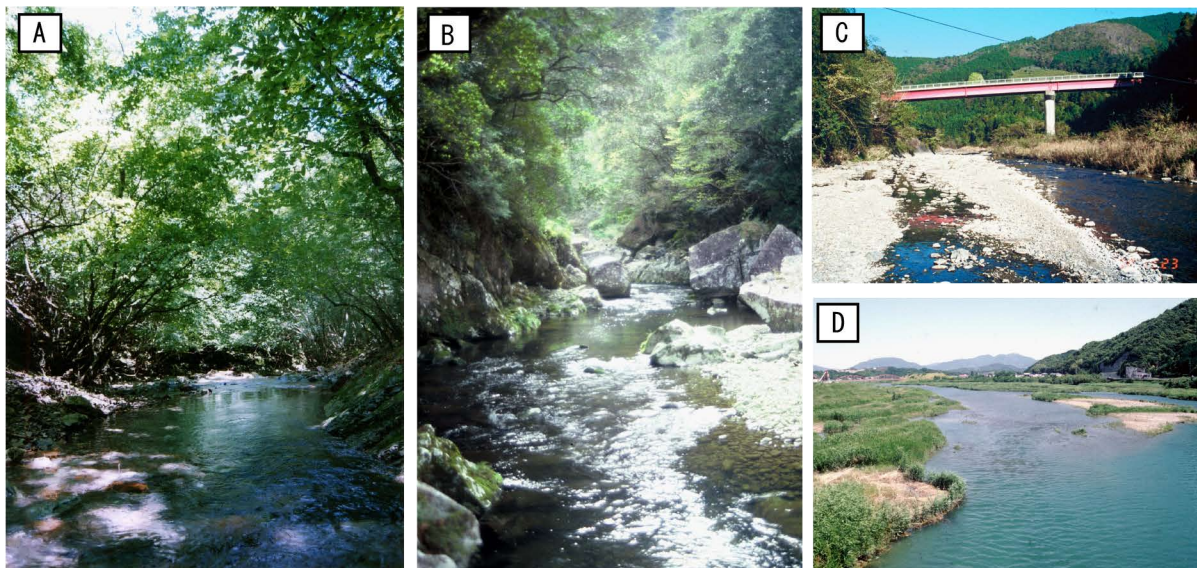
少し下ると、アマゴなどの魚類が生息し、魚をねらうヤマセミも見られ、ナガレヒキガエルも産卵する。中流域では、川は広く開けて水面によく日が当たり、アユの生息域となる。カジカガエルの鳴き声も聞かれ、各種の水生昆虫も多い。

こうした河川の自然環境は、自然林の減少とともに衰退し、多くの河川において昔の生物は変化してしまった。

止水域についてみると、かつての里山は周囲に森が広がり、その中に池や水田があつて、生物相も豊かであった。海に近いところでは、アカテガニやウナギなどがのぼってきた。池にはカメ類が生息していて、子どもたちにも親しまれてきた。南方熊楠は、子どもたちがもてあそんでいたクサガメを引き取り、自宅の庭で飼育し、熊楠死後も娘さんが続けて世話をした。このカメは熊楠邸で60年～90年生きたと言われている。

近年は、池や水田においても種々の原因で昔ながらの生物が減少してきたが、こうした自然環境において、外来の生物が繁殖して、本来の生態系を攪乱していると考えられている。古くから定着しているウシガエルやアメリカザリガニ、各地の水域で非常に多くなったカダヤシ・ブラックバス・アカミミガメなどのほか、最近では、アフリカツメガエルも各地で繁殖している。田辺市においても、アフリカツメガエルの駆除を試みたが、なかなかうまくいかなかった。

森林（自然林）を大切に、淡水環境においても本来の自然環境が継続されることを強く願っている。



川の様子の違い (A: 川の源流, B: 上流域, C: 中流域, D: 下流域)